

ご近所の お医者さん

476

川崎こどもクリニック院長 **川崎康寛さん** 一貝塚市

被災地域・町の診療所

今年の夏は、大阪府も地震や台風などの自然災害に見舞われました。災害が発生すると、医師会や大きな病院は医療チームを結成して被災地に向かい、建物の下敷きになるなどして負傷した人の治療に当たります。ニュースなどで

もよく見るような活動で

す。しかし、そうした華々しい活動も大事ですが、大きなけがをしていなくても、被災地域には医療を必要とする人がたくさんいます。熱を出してしま

日常診療の継続が大切

った子ども、高血圧や糖尿病の薬を続けている人などがそうです。したがって、被災地域では、普段は町の小さな診療所が関わっているような日常診療の継続も大切になります。

座薬を処方しようにも、その子の自宅が停電して冷蔵庫が使えないので座薬の保管場所がないケースがありました。粉薬の解熱剤を分包して処方していたらどうしていただろうと思います。



は被災していなくても、日ごろ電車で通勤する院長や従業員が出勤できずに診療困難となった事例がありました。また、診療所が停電したため、通電するまで1週間近く休診となった例もありました。最近では診療所も電子カルテをはじめとしてコンピューター化が進み、電気なしでは診療できなくなっています。薬を分包する機器も電気が必要です。9月の台風21号の際、当院がある地区はたまたま停電しませんが

も自家発電ができるようにした方が良さそうだと、というのもそうです。NTTの電話回線は停電しても通じる場合がありますが、光回線を使った電話は停電で通じなくなること実感しました。

こうした経験を生かしつつ、災害時においても、いかに診療を継続していくかを考えていくべきだという思いを強くしています。

(府医師会広報委員長)